

容貌と対人魅力

Physiognomic Features and Interpersonal Attraction

遠藤健治
ENDO, Kenji

文学部心理学科
Department of Psychology

問題

「人を見かけで判断してはならない」という警句があるとおり、われわれは他者に関する情報の多くを外見から得ている。とりわけ顔は大きな情報源となっている。人種、年齢、性別、所属階層といったデモグラフィックな属性ばかりでなく、健康状態や相手がいま感じている感情、さらにパーソナリティ特性のような内面的属性まで顔から読もうとしている。大坊（1993）は、「他人のパーソナリティやその他の個人的属性を当人の容貌特徴を手がかりとして推定している。しかもこのような見方は東西を問わず古くから一般化している」と述べている。たとえば、『電車の中で、年老いた女性が、空いている席がないため辛そうに立っていたので席を譲ったならば、ホッとて本当に助かったという様子で礼を言われた』という事例は、外見情報とりわけ相貌・表情の解釈なしには成立し得ない。性別の識別に関して、山口・加藤・赤松（1996）は、顔による性別の分類に選出される変数には、目・眉・鼻といった部分的な情報に関するものが多く見受けられるという結果を得ている。そして、男らしいと評価される顔は、眉と目の距離が短い、口が大きい、顔が長い、眉が長い、といった特徴があげられ、女らしいと評価される顔は、上唇が薄い、眉山の位置が外側にある、頬の面積が大きい、眉の面積が小さい、眉が下がっている、といった特徴があげられている（女らしさを表すという特徴は、化粧によって操作しうる部位が多いのは大変興味深い）。身体特徴ばかりでなく、相貌特徴によっても性別の識別がなされていることが示唆されたわけである。瀬谷（1986）によれば、「目・鼻・口などの形や大きさといったその人にとって不変の特徴からは、その人の気質・性格といった比較的持続的な（長期間にわたって不変な）心理的特性を読みとり、目や口の動きなどの比較的一時的な変化からは、感情や欲求などの一過性の心理的特性を判断する」という。このような顔のパーツや相貌特徴に注目することに対して、「われわれの表情判断は顔の部分よりも全体を基にしている（山田、1993）」、つま

り顔は単なるパーツの集合ではなく、全体（ゲシュタルト）として見るべきだという考えもあるが、パーツによる影響が大きいことも否定できない。山田・笹山（1999）は、顔の各パーツから形成される印象と顔全体から形成される印象との関連性を検討し、輪郭と目から形成される印象が、顔全体から形成される印象と相対的に一致していることを明らかにしている。顔による印象形成には、目というパーツが重要な役割を果たしている可能性があるわけである。

顔のパーツとそこに表出される感情に関して組織的に検討を行った先駆者は Ekman, P. & Friesen, W.V. (1975 工藤訳 1987) であろう。一連の研究で、たとえば、顔の構造的特徴と感情表出に関し、顔の下部と目の部分は「幸せ」、目は「哀しみ」、目と顔の下部は「驚き」、顔の下部と眉、額は「怒り」、顔の下部は「嫌悪」、目は「恐れ」の手がかりとなるとしている (Ekman, 2003)。郷田・宮本（2000）は顔面表情から感情を認知する際の部位の影響を検討したところ、怒り・恐れ・驚き・悲しみにおいては目周辺の影響が強く、嫌悪・幸福は口周辺の影響が強いことが分かった。感情ごとに、影響の強いパーツは異なるわけである。また、少し視点を変えて、鈴木・小谷津（1998）は表情から感情を読み取る際の顔色の影響を調べた結果、喜びの表情では赤みが増えると、その喜びの感情が強まり、哀しみの表情では青みが増えると哀しみの感情が強まる傾向を見いだしている。顔色も感情状態解読と無関係ではないようである。

Zebrowitz, L.A. (1997 羽田・中尾訳 1999) は、「人の顔には年齢、性別、人種、個性、感情、健康状態があらわれる。…顔にこれらの特性を読もうとする傾向の強さ、普遍性、適応価値は、同じく性格特性を読もうとする傾向の基礎となる。年齢など適応的に重要な属性の、顔にあらわれたしるしにたいするわれわれの反応は、そのしるしに似たところのある顔に過般化される傾向があり、とりわけ、性格の印象はそこから生まれる」として、われわれが人の相貌から性格特性まで読みとろうとする傾向の強さに言及している。人の内面性を判断するのは容易なことではなく、それを見誤ることにより損害を被ることも多いので、外見から性格特性等をステレオタイプ的に推測すること（暗黙裏のパーソナリティ観）は、できるだけ簡単に判断をしたいという人間の「経済」原理志向に合致する。それゆえ、われわれは、相貌特徴に大きな信頼をおいてしまうようである（大坊、1990; 2001）。

日本人の相貌特徴・容貌タイプと対人魅力・パーソナリティ認知との関連を調べた研究の先駆は林・津村・大橋（1977）であろう。彼らは、まず様々な顔写真を用いて容貌の認知次元を抽出している。それによれば、「ほっそりして目鼻立ちの整った」「色白、眼もとはつきり」「ふっくら」「口が小さい、下がり目」「口元のしまりのなさ」等の因子が抽出された。これらの容貌認知因子と、パーソナリティ認知との関係を見たところ、「ほっそりして目鼻立ちの整った」タイプは種々のパーソナリティ認知と結びつき、かつ魅力的な意味を持った

一般性の高い顔であること、一方「口元のしまりのなさ」は魅力が乏しい（親しみにくい、社会的に望ましくない）と見なされること、を見いだしている。大坊（1986）は、林ら（1977）の容貌認知次元に基づいて刺激図版を作り（たとえば、「ほっそりして目鼻立ちの整った」次元に該当する顔と該当しない顔）、対人魅力度を評定させた。その結果、「色白、目もとほっきり」次元に該当する顔と「ほっそりして目鼻立ちの整った」次元に該当する顔が魅力度が高く（魅力的、信頼性が高い、順応性が高い）評価された。また「口が小さい、下がり目」次元に該当しない顔（つまり口が大きく上がり目の顔）は最も社会的に活動的と認知された。村澤（1988）も、女性の30枚の顔写真を77名の女性被験者に呈示して、顔からうける印象を測定したところ、容貌特徴の「眼の大きさ」因子は印象の「親しみやすさ」因子と、容貌特徴の「目の上がり」は印象の「大人っぽさ」因子と、容貌特徴の「眼の二重」因子は印象の「セクシーさ」因子および「派手さ」因子とそれぞれ関連すること（目が丸いと親しみやすく感じ、目が上がり、口の幅・顎の幅が大きいと大人っぽく見えがちであること）を見いだしている。

鈴木（1993）は、20～50代の女性の顔写真を材料として、第一印象の因子構造、顔の形態印象の因子構造およびそれらの関係を検討した。その結果、印象評定の因子としては「あたたかさ」の因子、「洗練度」の因子、「活発さ」の因子、「若さ」因子の4因子が抽出された。顔の形態に関しては「肌のきれいさ」因子、「ふっくら度」因子、「眼のぱっちり度とほりの深さ」因子、「眉のボリューム」因子、「顔の大きさ」因子、「目・眉の集中度」因子、「顔の長さ」因子、「額の広さ」因子、「口の大きさ」因子、「目と眉の上がり具合」因子の10因子が抽出された。顔の形態因子と印象の因子との間で相関係数を算出したところ、いくつかの組み合わせで有意な相関が得られた。正の大きな相関係数が得られたものとしては「肌のきれいさ」と「若さ」($r=.67^{**}$)、「顔の大きさ」と「活発さ」($.400^{**}$)、「目のぱっちり度とほりの深さ」と「洗練度」($.378^{**}$)、「目と眉の集中度」と「活発さ」($.335^{**}$)等があげられ、負の大きな相関係数が得られた組み合わせとしては「ふっくら度」と「洗練度」($-.502^{**}$)、「目と眉の上がり具合」と「あたたかさ」($-.357^{**}$)等があげられた。

大坊・村澤・趙（1994）は、日本と韓国の女性を対象として、その顔の構造的特徴を計測し、主成分分析を行ったところ、8成分を析出した。「顔の全般的大きさ」、「上顔の広がり」、「顔の優先的魅力要因」（下顔の突出に関する指標、眼の間隔、大きさに関する指標）、「鼻の長さ、大きさ」、「両眼の間隔」、「額の広さと鼻の高さ」、「下顎の広さ」、「鼻下の長さ」である。そして、韓国人に比べて日本人は、正面顔中心に認知する傾向があり、美的であれば「好き」「かわいい」と比較的単純な見方をしていることが明らかになった。

箱田・尾田・原口・吉壽・赤松（2000）は、日本人男女の真顔静止画像を呈示し、顔の物理的特徴と、その顔からうける性格印象との関係について検討した。性格特性は「社会的望ましさ」「活動性」「知性」の3因子に集約され、その因子得点と、目、鼻、口などの顔のパ-

ツの物理的特徴との関係を調べたところ、男性の顔では目に関する特徴指標と知性因子との間に関係が認められ、女性の顔では顎に関する特徴指標と知性因子・社会的望ましき因子との間に関係が認められた。対象の性別により、性格印象判断の根拠とする顔のパーツが異なることを示唆している。

一連の研究を概観すると、いずれも、眼の特徴から印象が大きく影響を受けているといえよう。上記とは少し異なるアプローチだが、大坊(1991)は、他者の顔写真を呈示してどの部位を優先的に認知するかを検討したところ、対象が男性の場合は髪(34.5%)、眼(18.6%)、眉(17.9%)、鼻(9.7%)、口・唇(5.5%)という順であり、女性の場合は髪(27.5%)、眼(15.2%)、眉(12.3%)、口・唇(9.7%)、輪郭(8.8%)、鼻(8.3%)となり、優先部位やその重みづけが対象の性別により微妙に異なるが、眼が、他者を判断する際の重要な注目部位であることがわかる(自分の顔を呈示して好きな部位嫌いな部位を選択させた場合は、いずれも眼(好き:32.2%、嫌い:26.0%)が突出し、髪は比率を下けている(好き:14.9%、嫌い:9.8%)であった)。

また、因子として抽出されていない研究もあるが、肌の白さ(きれいさ)も紋切り型に高評価をうけやすい相貌特徴のようである。ポーラ文化研究所が305名の女子大生に対して行った肌の色に対する意識調査(2000)によれば、「白い肌」に対しては63%の人がうらやましいと回答し、「黒い肌」をうらやましいと回答したのは9%に過ぎず(53%がうらやましくないと回答)、白肌へのあこがれが大変強いと分析している。「白い肌」のイメージは「清潔」「上品」「女性的」「美しい」「かわいい」「やさしい」「好ましい」「知的」であった。「白い肌にする利点」は73%が「きれいに見える」と回答していた。一方、「日焼けした男性はいいと思いますか」に対しては46%が「はい」と回答しており、男性の「黒い肌」は女性よりも許容される傾向にあることが示されている。毛利(2005)は、男性の刺激画像の髪色と肌色を独立変数にしてパーソナリティ判断をさせたところ、黒髪・白肌に対して社交性と外向性が低く、道徳性が高く評価されたと報告している。肌の白さに関して、対象の性別により多少の相違は示唆されるものの、かなり堅固なステレオタイプが形成されているようである。

対人魅力の形成において、相貌の果たす役割は大きい。相貌特徴から紋切り型に一定の「良い」パーソナリティ特性を相手に見だし、好意を持つというプロセスを辿ることが想定されよう。しかし、ステレオタイプはこの一方向に対してのみ働くのではなく、好きという感情状態から、相貌を魅力的と評価し、パーソナリティ特性を「良い」と認知する(認知的に協和した状態とする)方向へも働くと考えられる。ステレオタイプは評価者の中で、双方向的(相貌評価→対人魅力、対人魅力→相貌評価)に機能しているものであろう。林(1978)は、漫画の登場人物の顔の特徴と印象との関連を検討しているが、これは、相貌評

価とパーソナリティ特徴判断の関連が双方向的にステレオタイプ化されていることを如実に立証するアプローチであった。

そこで、本報告では、一連の研究のように顔写真を被験者の現前に呈示するのではなく、任意の知人を思い浮かべてもらい、その想起された相貌を評価させるという手続きを採用して、相貌評価と対人魅力評価との関連を検討する。記憶の特性として、対象の特徴が強調されるとするならば、対象を想起した場合にステレオタイプはより顕著に表れるであろうと仮定される。現象としては、好きな人として想起した対象の対人魅力は高く評価され、相貌は、色が白く、目鼻立ちが整っているという特徴を持っているであろう、と予測がたてられる。以下、その検討結果を報告する。

なお、本報告は、下記授業において受講者から収集したデータを記述・分析したものである。学内誌に掲載し、同受講生にクラス全体の傾向をフィードバックするという目的を持つものでもある。

方法

大学生に、指定した人物を想起させ、その人物に対する愛情と好意の程度の評定、対人魅力の評価、その相貌特徴の判断を求めた。詳細は以下の通りである。

被調査者 本学 2006 年度青山スタンダード科目 1 年次配置科目「自己理解（総合科目）」受講生 344 名（女性 225 名，男性 119 名）。データは 2006 年 10～12 月に、「対人魅力」に関する授業の一環として収集され、集計結果は当該授業の中でフィードバックされている。

質問紙 愛と好意の程度については、Rubin (1970) の Love scale を筆者が日本語訳したものを用いた。26 項目からなり、13 項目が愛情、他 13 項目が好意を測定する項目となっている。愛情はさらに、①親和、②援助傾向、③独占と専一の 3 要素に分けられる。以下に項目を示す（括弧の中は、愛と好意の諸側面である）。教示は、「以下の文章を読んで、自分ほどの程度当てはまるかを考えて、それぞれ該当する箇所に○をつけなさい。文中の○○○には異性の恋人（いない場合は片思い、憧れの人）を想定しなさい」とした。回答は「その通り」から「違う」までの 9 段階でなされた。異性の恋人を想定して回答を求めた後、異性の友人、嫌いな異性を想定させ、それぞれ同様に回答を求めた。

1. 私は、○○○に信頼されていると思うと、とても嬉しい（親和）
2. 私は○○○と一緒にいると、いつも○○○と同じ気持ちでいられる（好意）
3. 寂しくなったとき、私が思い浮かべるのは、先ず○○○のことである（親和）
4. 私は、○○○が賞賛を得るのは容易なことだと思う（好意）
5. 私は、○○○のようになりたいと思う（好意）

6. 私には、〇〇〇を幸福にする責任があると思う（援助）
7. 私は、〇〇〇の適切な判断を信頼している（好意）
8. 私は、実際すべてのことについて、〇〇〇を信用できる（独占）
9. 〇〇〇が幸福であるかどうか、私の大きな関心事の1つである（援助）
10. 〇〇〇は、周囲の人の関心をすばやく引きつけることができる人だと思う（好意）
11. 私は、〇〇〇を責任ある職に、自信をもって推薦することができる（好意）
12. 私は〇〇〇と一緒にいるとき、ただ〇〇〇を見ているだけで時間がすぐにたってしまう（親和）
13. 私は、〇〇〇が大変知的な人だと思う（好意）
14. 私には、〇〇〇のいない暮らしなど考えられない（親和）
15. 私にとって、〇〇〇の欠点を無視するのは簡単なことである（独占）
16. 私は、クラスやグループの選挙のときには、〇〇〇に投票するだろう（好意）
17. 私は、〇〇〇のほとんどすべてのことを許せるだろう（独占）
18. 〇〇〇と知り合いになると、大抵の人は〇〇〇に好意的な対応をするだろう（好意）
19. 私と〇〇〇とは、お互いによく似ていると思う（好意）
20. 私は〇〇〇を独占したいと思う（独占）
21. 〇〇〇が気を病んでいるときには、私は何をさしおいてもまず〇〇〇を元気づけるべきである（援助）
22. 私は、〇〇〇と大変気があう（好意）
23. もし〇〇〇と会えなくなったら、私はとても悲しい気持ちになるだろう（親和）
24. 〇〇〇は、私が知っている中で、最も好ましい人物の一人である（好意）
25. 私は〇〇〇のためなら、ほとんど、どんなことでもするだろう（援助）
26. 私の考えでは、〇〇〇は、非常に成熟した人である（好意）

対人魅力測定尺度には、林（1978）の20項目を用いた。これにより対人魅力を①個人的親しみやすさ、②社会的望ましさ、③力本性の3次元から捉えることができる。ただし、原典通りであると、力本性に該当する項目が少ないので、力本性ないし活動性に関する項目として「興奮しやすい」「活発な」「社交的な」「きっぱりした」の4項目を追加した。以下に項目を示す（括弧内は、林（1978）の因子負荷量の表中で、各項目についてもっとも因子負荷量の高い因子名を記す）。教示は、「以下の項目について、想定した相手の人柄に該当するところに○をつけなさい」とした。回答は「非常に～かなり～やや～どちらともいえない～やや～かなり～非常に」の7段階でなされた。想定する対象は、先ず異性の恋人（もしくは片想いの人）、次いで、異性の友人、嫌いな異性を想定させた。

1. 心のひろい — 心のせまい (個人的親しみやすさ)
2. 明るい — 暗い (個人的親しみやすさ)
3. さっぱりした — しつこい (個人的親しみやすさ)
4. 責任感の強い — 無責任な (社会的望ましさ)
5. 親しみやすい — 親しみにくい (個人的親しみやすさ)
6. 意欲的な — 無気力な (個人的親しみやすさ)
7. がまん強い — あきっぽい (社会的望ましさ)
8. 自信のある — 自信のない (力本性)
9. まじめな — ふまじめな (社会的望ましさ)
10. 親切な — いじわるな (個人的親しみやすさ)
11. 積極的な — 消極的な (力本性)
12. 感じのよい — 感じのわるい (個人的親しみやすさ)
13. ひかえめな — じゃばりな (社会的望ましさ)
14. 信頼できる — 信頼できない (社会的望ましさ)
15. ユーモアのある — ユーモアのない (個人的親しみやすさ)
16. すなおな — いじっぱりな (個人的親しみやすさ)
17. 知的な — 知的でない (社会的望ましさ)
18. 落ち着いた — せっかちな (社会的望ましさ)
19. 誠実な — 不誠実な (社会的望ましさ)
20. 意志が強い — 意志が弱い (力本性)
21. 興奮しやすい — 冷静な (力本性)
22. 活発な — おとなしい (力本性)
23. 社交的な — 社交性のない (力本性)
24. きっぱりした — ぐずぐずした (力本性)

容貌の評価には、鈴木 (1993) の 24 項目を用いた。9 つの容貌の特徴を記述することができる。とりわけ上述した肌の白さに関する特徴が含まれている点で、本研究の目的に適合している。以下に項目を示す (括弧内は、容貌の因子)。教示は、「以下の項目について、想定した人の顔の特長に該当する箇所に○をつけなさい」とした。回答は「かなり～やや～ふつう～やや～かなり」の 5 段階でなされた。想定する対象は、先ず異性の恋人 (もしくは片想いの人)、次いで、嫌いな異性を想定させた。

1. 色の白い — 色の黒い (肌のきれいさ)

8 文学部『紀要』 第49号

2. 肌がきれい — 肌がきたない (肌のきれいさ)
3. シミ・ソバカス・シワが目立たない — シミ・ソバカス・シワが目立つ (肌のきれいさ)
4. 頬のふっくらした — 頬のこけた (ふっくら度)
5. 鼻の低い — 鼻の高い (ふっくら度)
6. あごが丸い — あごが尖っている (ふっくら度)
7. 目が丸い — 目が細い (目もとの鮮明さと彫りの深さ)
8. 目が大きい — 目が小さい (目もとの鮮明さと彫りの深さ)
9. ほりが深い — 平面的 (目もとの鮮明さと彫りの深さ)
10. まゆの太い — まゆの細い (眉のボリューム)
11. まゆが長い — まゆが短い (眉のボリューム)
12. 眉が濃い — 眉が薄い (眉のボリューム)
13. 顔の大きい — 顔の小さい (顔の大きさ)
14. エラがはっている — エラがはっていない (顔の大きさ)
15. 目と目が近い — 目と目が離れている (目と眉の集中度)
16. 眉と眉が近い — 眉と眉が離れている (目と眉の集中度)
17. あごが長い — あごが短い (顔の長さ)
18. 目から下が長い — 目から下が短い (顔の長さ)
19. 額が広い — 額が狭い (額の広さ)
20. 額に丸みがある — 額が平面的 (額の広さ)
21. 唇が厚い — 唇が薄い (口の大きさ)
22. 口の大きい — 口の小さい (口の大きさ)
23. 目が上がっている — 目が下がっている (目と眉の上がり具合)
24. 眉が上がっている — 眉が下がっている (目と眉の上がり具合)

Love scale と対人魅力測定尺度は同一授業時間内に実施し、容貌評価は1週間おいて、「先週回答した時に想定した人の顔を思い出して、今回の質問に回答して下さい」との教示の下で行った。

結果

Love scale 回答の「その通り」を9点～「違う」を1点と得点化し、愛の3つの基本要素については、各要素に属する項目を集計し平均値を算出した。また、愛に関する13項目の合計点および好意に関する13項目の合計点を算出した。結果を表1に示す。

なお表中、男性、女性と性別が記されているが、これは回答者の性別である。したがって対象者はそれぞれの異性となる。

〔親和と依存〕は「信頼されていると思うと、とても嬉しい」「会えなくなったら、とても悲しい」等の項目で示されるが、男女とも恋人が最も高く、片想い、友人、嫌いな人の順番に値が低くなっている。データとしては一部に対応があるのだが、4（対象）×2（回答者の性別）の被験者間要因の分散分析を援用してみると、対象の主効果が有意であった（ $F_{(3,1028)} = 680.162, p < .001$ ）。

表1. Love Scale の平均値

対象	〔親和と依存〕 平均値		〔援助傾向〕 平均値		〔独占と専心〕 平均値	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
恋人	7.0	7.3	7.1	6.6	5.6	5.7
片想い	6.6	6.6	6.7	5.6	5.8	5.3
友人	4.8	4.5	4.4	3.8	4.5	4.2
嫌いな人	1.8	1.7	1.6	1.4	1.9	1.5

対象	〔愛情〕 合計点		〔好意〕 合計点		人数	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
恋人	85.3	85.9	77.3	79.8	41	96
片想い	82.6	76.7	77.4	76.5	82	132
友人	59.3	54.7	72.2	71.0	119	225
嫌いな人	23.1	20.3	30.1	26.5	118	223

〔援助傾向〕には「幸せにする責任がある」「その人のためなら、なんでもする」等の項目が属するが、ここでも、恋人>片想い>友人>嫌いな人、という値の大小関係が認められる（ $F_{(3,1028)} = 582.575, p < .001$ ）。また、性差も見られ（ $F_{(1,1028)} = 30.95, p < .001$ ）、男性の回答値の方が女性の回答値よりも高い。

〔独占と専心〕には「すべてのことを許せる」「独占したい」等の項目が属する。ここでも対象の主効果、性別の主効果がともに有意で、恋人=片想い>友人>嫌いな人、男性>女性という大小関係が認められた（ $F_{(3,1028)} = 396.946, p < .001, F_{(1,1028)} = 6.691, p < .01$ ）。

これらを総合すると〔愛情〕の合計点となる。〔援助傾向〕〔独占と専心〕同様、対象の主効果、性別の主効果がともに有意で、恋人>片想い>友人>嫌いな人、男性>女性という値の大小関係が認められた（対象： $F_{(3,1028)} = 817.392, p < .001$ 、性別： $F_{(1,1028)} = 8.93, p < .01$ ）。

一方、尊敬の程度を示す〔好意〕については、性差はなく、対象の主効果のみが有意である（ $F_{(3,1028)} = 584.536, p < .001$ ）。大小関係としては、恋人=片想い>友人>嫌いな人、であるが、友人と恋人（片想い）の値は、〔愛情〕の点数の場合のように離れてはいない。

各要素間の相関を求めると、男性評価者においては .81～.97、女性評価者においては .77～.96、とすべての組み合わせで有意な相関係数 ($p<.001$) が得られている。今回の評定の対象者を恋人、友人、嫌いな人と広い範囲にわたって想定していることが一因とも考えられるので、嫌いな人を対象としたデータを抜いて相関を求めると、相関係数は .53～.92 とやはりすべての要素間で有意な関係が認められた。

対人魅力評定 上記のリストで左側に記されている形容語側で「非常に」と回答されているものを7点～「ふつう」を4点～右側に記されている形容語側で「非常に」と回答されているものを1点と得点化し、①個人的親しみやすさ、②社会的望ましさ、③力本性の各因子に属する項目を集計し平均値を算出した。結果を表2に示す。性別は表1同様、評定者の性別である。

表2. 対人魅力評定の平均値

対象	個人的親しみやすさ		社会的望ましさ		力本性		人数	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
恋人	5.1	5.3	5.1	5.0	4.7	4.9	40	90
片思い	5.4	5.2	5.0	5.0	4.9	5.0	81	126
友人	5.4	5.3	4.8	4.8	5.1	4.9	117	212
嫌いな人	3.6	3.5	3.4	3.3	4.2	4.1	115	210

いずれの因子においても、男女ともに、恋人と片思いの値が高く、友人も遜色ない値で続いている。嫌いな人に対しては、上記3者に比べると有意に低い値ではあるが(対象の主効果を検出後、多重比較。個人的親しみやすさ： $F_{(3,983)} = 282.875, p<.001$ 、社会的望ましさ： $F_{(3,983)} = 195.089, p<.001$ 、力本性： $F_{(3,983)} = 39.321, p<.001$)、中点4に近い値もしくはそれよりやや低い値を与えており、嫌いな人の魅力を紋切り型に極度におとしめているわけではない。

因子間の相関を求めると、男性評価者においては .42～.62、女性評価者においては .27～.65、とすべての因子間で有意な相関係数 ($p<.001$) が得られた (Love scale と同様、嫌いな人を対象としたデータを抜いて相関を求めると、相関係数は .14～.53 と数値自体は低くなるものの1%水準で有意な関係が認められた)。

Love scale と対人魅力評価との関係 Love scale の得点と対人魅力評価値との相関を求めると、.25～.75で、すべての組み合わせで有意な正の相関が得られた ($p<.001$)。

容貌評価 上記のリストで左側に記されている形容語側で「かなり」と回答されているものを5点～「ふつう」を3点～右側に記されている形容語側で「かなり」と回答されているものを1点と得点化し、9つの容貌因子に属する項目を集計し平均値を算出した。表3に結果を示す(性別は、評価者の性別である)。

〔肌のきれいさ〕では、男性の評価値が女性の評価値よりも高い ($F_{(1,527)} = 18.701$, $p < .001$)。すなわち女性の対象の方が肌がきれいと言われている。対象に関しては、恋人 = 片想い > 嫌い、という関係が認められる ($F_{(2,527)} = 52.406$, $p < .001$)。

表3. 容貌評価の平均値

肌のきれいさ			目と眉の集中度			ふっくら度		
対象	評価者		対象	評価者		対象	評価者	
	男性	女性		男性	女性		男性	女性
片想い	3.9	3.6	片想い	3.0	3.0	片想い	3.2	2.7
恋人	4.0	3.3	恋人	3.1	3.0	恋人	3.0	2.6
嫌いな人	3.0	2.9	嫌いな人	3.0	3.0	嫌いな人	3.2	3.0

顔の長さ			目もとの鮮明さと彫りの深さ			額の広さ		
対象	評価者		対象	評価者		対象	評価者	
	男性	女性		男性	女性		男性	女性
片想い	2.9	3.0	片想い	3.2	3.1	片想い	3.0	3.0
恋人	2.9	3.1	恋人	3.3	3.0	恋人	3.0	3.1
嫌いな人	3.0	3.0	嫌いな人	2.8	2.7	嫌いな人	3.2	3.0

眉のボリューム			口の大きさ			顔の大きさ		
対象	評価者		対象	評価者		対象	評価者	
	男性	女性		男性	女性		男性	女性
片想い	2.9	3.1	片想い	2.9	3.0	片想い	2.3	2.7
恋人	2.7	3.3	恋人	2.6	3.2	恋人	2.4	2.6
嫌いな人	2.9	3.1	嫌いな人	3.1	3.1	嫌いな人	3.1	3.1

目と眉の上がり具合			人数		
対象	評価者		対象	評価者	
	男性	女性		男性	女性
片想い	3.0	3.1	片想い	64	109
恋人	3.1	3.1	恋人	28	69
嫌いな人	3.3	3.1	嫌いな人	88	175

〔ふっくら度〕に関しては、全体として評価値は中点前後であるが、男性評価者は女性対象者を、よりふっくらしたと評価している ($F_{(1,527)} = 23.541$, $p < .001$)。また、恋人や片想いを嫌いな人より、ふっくらしていないと評価している ($F_{(2,527)} = 3.245$, $p < .05$)。

〔目もとの鮮明さと彫りの深さ〕では、男女ともに、恋人と片想いが嫌いな人より高く評価されている ($F_{(2,527)} = 13.737$, $p < .001$)。性差は検出されていない。

〔眉のボリューム〕では、女性評価者の値の方が男性評価者の値よりも有意に高い ($F_{(1,527)} = 31.948$, $p < .001$)。男性対象の方が女性対象よりも眉が太いということである。対象者の主効果は検出されていない。

〔口の大きさ〕では、対象に関わりなく、男性の評価値の方が女性の評価値よりも小さい

($F_{(1,527)} = 9.170, p < .01$)。すなわち、恋しい女性の口は小さい、ということである。

〔顔の大きさ〕は、恋人、片想いともに嫌いな人よりも値が小さく、かつ値そのものも小さい ($F_{(2,527)} = 41.364, p < .001$)。また、同じ傾向ながら、男性の評価値の方が女性の評価値よりも小さい ($F_{(1,527)} = 6.237, p < .05$)。すなわち、恋しい女性の顔は小さい、ということである。

他の〔目と眉の集中度〕〔顔の長さ〕〔額の広さ〕〔目と眉の上がり具合〕では対象の主効果も評価者の性別の主効果も有意ではなく、平均値はほとんど中点付近にまとまっている。

相貌評価と Love scale、対人魅力評価との関係 評価者の性別ごとに、相貌評価の9因子と、Love scaleの3要素の平均値、愛の合計値、好意の合計値、および対人魅力評定の3因子との相関係数を求めた。男性評価者（女性が対象）の結果を表4に、女性評価者（男性が対象）の結果を表5に示す。

男性評価者に関しては、〔肌のきれいさ〕〔目もとの鮮明さと彫りの深さ〕と Love scale のすべての値および対人魅力の〔個人的親しみやすさ〕因子、〔社会的望ましさ〕因子との間に有意な正の相関が、〔顔の大きさ〕〔口の大きさ〕と Love scale のすべての値および対人魅力の〔個人的親しみやすさ〕因子、〔社会的望ましさ〕因子との間に有意な負の相関が得られている。また〔目と眉の上がり具合〕と Love scale のすべての値との間に有意な負の相関が得られている。女性の容貌の〔肌が白くきれい、目鼻立ちがはっきりしている、顔が小さい、口が小さい、目と眉がつり上がっていない〕という特徴と〔愛〕〔好意〕〔良い人〕という評価とが結びついているわけである。なお、対人魅力の力本性は〔ふっくら度〕で負の相関が見られるだけで、他の相関関係は認められない。

表4. 男性評価者における容貌評価と好意、魅力度評価との関連

相貌評価の次元	親和	援助	独占	愛情合計点	好意合計点	個人的親しみやすさ	社会的望ましさ	力本性
肌のきれいさ	.45***	.46***	.41***	.46***	.47***	.34***	.34***	.10
ふっくら度	-.03	-.01	-.01	-.02	.02	-.05	-.11	-.19**
目もとの鮮明さと彫りの深さ	.26***	.26***	.23**	.26***	.31***	.27***	.22**	.15
眉のボリューム	-.05	-.06	-.01	-.04	.02	-.03	-.04	.03
顔の大きさ	-.42***	-.45***	-.36***	-.43***	-.41***	-.31***	-.30***	-.03
目と眉の集中度	.02	-.02	.00	.00	.00	-.06	.00	-.10
顔の長さ	-.09	-.14	-.08	-.11	-.12	-.10	-.08	.08
額の広さ	-.09	-.09	-.03	-.07	-.11	-.06	-.10	.00
口の大きさ	-.22**	-.22**	-.19**	-.22**	-.21**	-.16*	-.27***	-.03
目と眉の上がり具合	-.20**	-.18*	-.21**	-.20**	-.23**	-.14	-.14	-.09

表5. 女性評価者における容貌評価と好意、魅力度評価との関連

相貌評価の次元	親和	援助	独占	愛情合計点	好意合計点	個人的親しみやすさ	社会的望ましさ	力本性
肌のきれいさ	.31***	.32***	.29***	.32***	.33***	.27***	.29***	.18***
ふっくら度	-.23***	-.22***	-.21***	-.23***	-.20***	-.12*	-.11*	-.01
目もとの鮮明さと彫りの深さ	.16**	.17**	.21***	.18**	.17**	.17**	.08	.12*
眉のボリューム	.07	.08	.09	.08	.06	.07	.16**	.05
顔の大きさ	-.27***	-.26***	-.26***	-.27***	-.26***	-.21***	-.15**	-.11*
目と眉の集中度	.03	.05	.05	.05	.04	-.07	-.04	-.06
顔の長さ	.06	.06	.04	.05	.02	-.05	.03	-.08
額の広さ	.03	.01	.01	.02	.05	.05	.04	.06
口の大きさ	.01	.05	.06	.04	.01	.06	.01	.04
目と眉の上がり具合	-.03	-.04	-.06	-.04	-.01	-.03	-.10	.00

女性評価者に関しては、[肌のきれいさ]とLove scaleのすべての値および対人魅力のすべての因子との間に有意な正の相関が、[目もとの鮮明さと彫りの深さ]とLove scaleのすべての値および対人魅力の[個人的親しみやすさ]因子、[力本性]因子との間に有意な正の相関が、[ふっくら度]とLove scaleのすべての値および対人魅力の[個人的親しみやすさ]因子、[社会的望ましさ]因子との間に有意な負の相関が、[顔の大きさ]とLove scaleのすべての値および対人魅力のすべての因子との間に有意な負の相関が得られた。

考察

Love scale [親和と依存]では、男女ともに、恋人が最も高く、片思い、友人、嫌いな人の順番に愛情の程度が低くなっていた。一緒にいたいという気持ちは「恋人」と「友人」では違いがあるということである。この傾向は[援助傾向]と[独占と専心]でも同様に見られた。また、後者2要素では、性差も見られ、男性の方が女性よりも得点が高かった。すなわち、男性の方が相手に対して、より夢中になっており、「恋人のためなら何でもする」と思っているということである。これはしばしば見られる傾向で、年齢的にも、ケルビーノのように「恋に恋してる」「恋する自分を演じている」とも考えられよう。一方[好意]については、男女ともに、恋人、片思い、友人の値は、有意差はあるものの、比較的接近していた。恋人と友人を分けるものは、尊敬の程度よりも、当然のことながら、愛情の程度のようなものである。しかし、今回の被調査者において、各要素間の相関を求めると、すべての組み合わせで有意な相関関係が認められた。原典としたRubin (1970)では、[親和と依存]、[援助

傾向]、[独占と専心]はそれぞれ異なる意味を持つ要素であったが、今回の評定は、好き-嫌いという一次元に集約されているようである。大学1年生が大勢であるため、様々な愛の形を経験しておらず、好意的感情があまり分化していないとも推測される。

対人魅力評定 男女ともに、[個人的親しみやすさ][社会的望ましさ][力本性]のいずれの因子においても、恋人と片想いの値が高く、友人も近い値となった。因子間の相関も有意であった。好きな人はどの因子の魅力もある、嫌いな人はどの因子の魅力も乏しい、というステレオタイプ化された評価傾向がうかがえる。Love scaleの得点と対人魅力評価値の間でもすべて有意な正の相関が得られ、[好き]という感情と[魅力的]という評価の密接な(一体化された)関連が示唆される。

容貌評価 まず、注目点の1つは眼であった。男女ともに、恋人と片想いの方が、嫌いな人より[目もとの鮮明さと彫りの深さ]が高く評価されていた。恋人は、嫌いな人より、目鼻立ちがはっきりしているのである。近代的な美しさの大きな要因でもある。[好き]と[美的]との関連が確認されたといえよう。

もう1つの注目点であった[肌のきれいさ]では、女性の対象者の方が、男性の対象者よりも、肌がきれいと言われている。また、男女ともに、想定した相手が恋人と片想いは、嫌いな人より肌がきれい、という評価であった(恋人と片想いは同程度)。対象が男性であっても(女性はもとより)、恋しい人の肌は白く、きれいと言われているわけである。柳瀬・児玉・中田・矢部(1970)によれば、記憶した肌色は実際の肌色よりも明度が高い傾向がある。また、棟方(1993)は、化粧によって肌色を変化させた場合、美しいと視感評価されるのは、素肌よりも明度が高い領域であると述べている。すなわち、好きな相手(恋人、片想い)は美的な存在であり、美的な存在故に肌が白いと認知し、記憶の中でより白く特徴づけられる、というプロセスが働いたと見ることができよう。

他の容貌特徴では、男性対象者の方が女性対象者よりも[眉のボリューム]が有意に多い(眉が太い)という結果が興味深い。「問題」で見たように、[女らしい]と評価される顔は[眉の面積]が小さいのであれば(山口・加藤・赤松、1996)、化粧で眉の太さを変えることにより、認知される性度を統制することが可能である(実際の化粧がそのような効果をねらったものであり、そのような意図を達成することができるということが確認されたということもできる)。

男女で違いの出た相貌特徴は他に[口の大きさ]と[顔の大きさ]がある。両者とも、想定した対象に関わりなく、女性の方が口も顔も小さい、すなわち[小顔]ということである。その他の相貌特徴では、想定した対象間で差はなく、好きな人と嫌いな人とで、識別に寄与する相貌特徴と寄与しない相貌特徴とがあるようである。

相貌に関し総括するならば、恋しい人の顔は、肌が白くきれいで、ややほっそりとして、彫りが深く、小顔ということである。その傾向は、女性対象者により強く見られるが、男性

対象者にも同様に見られる。男性の恋人も、女性ほどではないにしても、肌が白くきれいで、ややほっそりとして、小顔である。容貌のステレオタイプと言ってよいだろう。

相貌評価と Love scale、対人魅力評価との関係 女性を対象者とした場合、女性の容貌の「肌が白くきれいで、目鼻立ちがはっきりしている、顔が小さい、口が小さい、目と眉が上がり上がっていない」という特徴と「愛」「好意」(好きな人)、「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」(良い人)という評価とが結びついていた。男性を対象者とした場合、男性の容貌の「肌が白くきれいで、目鼻立ちがはっきりしている、顔がふっくらしていない、顔が小さい」という特徴と「愛」「好意」(好きな人)、「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「力本性」(良い人)という評価とが結びついていた。

男女に共通する愛と魅力に関連する容貌特徴としては「肌のきれいさ」「目もとの鮮明さと彫りの深さ」「顔の小ささ」があげられる。所謂美形-美男、美女-の容貌特徴と言えるだろう。行場・伊師・蒲池(2004)はモーフィング技術を駆使して、刺激の顔を様々に変化させて印象を測定したところ、男性顔でも女性顔でも、平均顔を適度に女性化すると魅力が増したと報告している。美男は、女性の相貌特徴を適度に取り込んだものともいえる。行場ら(2004)は「画像的に子供化された顔に魅力を感じるのには、心理的側面から分析すると、子供らしい印象に依拠するのではなく、むしろ女性顔が潜在的にもつ「美感性」や「柔和性」に代表される特性を強めた印象に基づくものである」とも述べているが、男性の顔は女性化されることによって、「美感性」や「柔和性」というポジティブなパーソナリティ特性を認知されることになる。男性的な顔が支配性、攻撃性、冷徹性などのネガティブなパーソナリティ性格特性を感じさせるものであるならば、そのような人物への接近は危険を予知させる。女性から見た場合、「肌が白くきれいで、目鼻立ちがはっきりしている、顔が小さい」という相貌特徴は、危険ではない男性のサインとして機能している可能性もある。もしも男性の顔が美しくないならば対人魅力を低く評価するというステレオタイプが、回避条件付けとして形成されたものであるならば、それを修正する機会を今後も回避し続けることになるので、消去することは難しい。結果的にステレオタイプは堅固となる。

想定した性別によって愛と魅力に関連する特徴が異なるものも見いだされた。好意度や対人魅力評価の高い女性の相貌特徴として、「口が小さい」「目、眉が上がり上がっていない」が上がっている(男性対象者には上がっていない)。逆に、好意度や対人魅力評価の高い男性の相貌特徴として「ふっくらしていない」が上がっている。美しいという相貌評価の上に、女性に対しては「大きな口」や「目や眉があがった」顔から想起されるパーソナリティ特性(たとえば、冷たい/いじわるな/こわい/活発な/しっかりした/男性的な/知的でない/上品でない、等。鈴木(1993)による)が求められていない。男性に対しては、「ふっくらしている」顔から想起される人格特性(たとえば、知的でない/上品でない/田舎っぽい/活発な/しっかりした/男性的な/子供っぽい、等。鈴木(1993)による)が求められていな

い、ということが示唆される。ステレオタイプの効用として危険の回避があげられるが、今回の被調査者においてもそのようなネガティブな特性を予め回避する動機の可能性が推察される。

以上により、林ら（1977）や大坊（1986）の「ほっそりして目鼻立ちの整った」顔は対人魅力を高く評価されるというステレオタイプの存在を、想定した対象においても確認することができた。

文献

- 大坊郁夫 1986 対人魅力印象に及ぼす身体的特徴の影響 日本社会心理学会第27回大会発表論文集, 67-68.
- 大坊郁夫 1990 コミュニケーションとしての「表情」を探る 化粧文化, 23,29-36.
- 大坊郁夫 1991 容貌の構造的特徴と対人魅力 化粧文化, 24,55-68.
- 大坊郁夫 1993 顔はつくられる：文化と美意識 吉川左紀子・益谷真・中村真（編）1993 顔と心-顔の心理学入門 サイエンス社, 272-292.
- 大坊郁夫 2001 心理学における外見の研究-顔は心をどう伝えるか- 化粧文化, 41,52-59.
- 大坊郁夫・村澤博人・趙鏞珍 1994 魅力的な顔と美的感情-日本と韓国における女性の顔の美意識の比較 感情心理学研究, 1,101-123.
- Ekman, P. 2003 EMOTION REVEALED: Understanding Faces and Feelings. The Orion Publishing Group Limited, London (菅靖彦訳 2006 顔は口ほどに嘘をつく 河出書房新社)
- Ekman, P. & Friesen, W.V. 1975 Unmasking the face. Prentice-Hall (工藤力訳 1987 表情分析入門 誠信書房)
- 郷田覚・宮本正一 2000 感情判断における顔部位の効果 心理学研究, 71,211-218.
- 行場次朗・伊師華江・蒲池みゆき 2004 顔の魅力を規定する要因の実験計量心理学的分析 コスメトロジー研究報告, 12,124-130.
- 箱田裕司・尾田政臣・原口雅浩・吉寄志保・赤松茂 2000 顔の物理的特徴と性格印象 電子情報通信学会技術研究報告 .HIP ヒューマン情報処理, 99 (no.582), 25-28.
- 林文俊・津村俊充・大橋正夫 1977 顔写真による相貌特徴と性格特性の関連構造の分析 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 24,35-42.
- 林文俊 1978 相貌と性格の仮定された関連性 (3) 漫画の登場人物を刺激材料として 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 25,41-56.
- 棟方明博 1993 メーキャップと色彩 資生堂ビューティーサイエンス研究所 (編) 1993 化粧心理学 フレグナンスジャーナル社, 92-98.
- 村澤博人 1988 顔の印象度の基礎的研究 化粧文化, 18,89-100.
- 毛利暁子 2005 髪色・肌色の異なる男性の顔画像に対する印象評価 日本色彩学会誌, 29,361.
- ポーラ文化研究所 2000 女子大生に見る肌色観—白肌と顔黒のはざままで 化粧文化, 40,80-82.
- Rubin, Z. 1970 Measurement of Romantic Love. Journal of Personality and social Psychology, 16, 265-273.
- 鈴木恒男・小谷津孝明 1998 表情から認知される感情に及ぼす顔色の効果に関する研究 日本色彩学会誌,

22, 45-52.

鈴木ゆかり 1993 顔の形態と印象の関係 資生堂ビューティーサイエンス研究所 (編) 1993 化粧心理学 フレグナンスジャーナル社, 124-133.

瀬谷正敏 1986 対人魅力と「下まぶた」化粧文化, 14, 51-60.

山田覚 1993 表情カテゴリーの内的関係性と顔の物理的特性 異常行動研究会 (編) 1993 ノンバーバル行動の実験的研究 川島書店, 15-177.

山田貴恵・笹山郁生 1999 顔のパーツから形成される印象と顔全体から形成される印象との関連性の検討 福岡教育大学紀要, 48 (第4分冊), 229-239.

山口真美・加藤隆・赤松茂 1996 顔の感性情報と物理的特徴との関連について-年齢/性の情報を中心に 電子情報通信学会論文誌 A 基礎・境界, 79, 279-287.

柳瀬徹夫・児玉晃・中田敏子・矢部和子 1970 膚色の記憶色に関する研究 色彩研究, 17, 2-17.

Zebrowitz, Leslie A. 1997 Reading Faces: Window to the Soul? Westview Press, A Division of HarperCollins Publishers, Inc. (羽田節子・中尾ゆかり訳 1999 顔を読む 大修館書店)